

招待講演実施報告



RQES2018S 招待講演 「「知」の集積と活用の場による農業分野の技術革新」実施報告

RQES2018S 発表大会実行委員会

第26回品質工学研究発表大会（RQES2018S）1日目の6月27日（水）、招待講演「「知」の集積と活用の場による農業分野の技術革新」が行われた。講演者は、農林水産省農林水産技術会議事務局研究推進課産学連携室室長の野島昌浩氏と、「知」の集積と活用の場産学官連携協議会運営委員の折戸文夫氏である。品質工学はあらゆる分野に適用できる「評価のための工学」であると言われている一方で、学会誌に掲載されている論文や研究発表大会で発表される研究事例の多くが工業分野であるという現状がある。大会のメインテーマとして前回大会から引き続き採用されている「あらゆる分野に評価でイノベーションを」は、品質工学によって「あらゆる分野」で合理的な評価方法を確立し、社会の自由の拡大に貢献していこうという意味がある。本大会における招待講演は、農林水産省が進めている産学官連携プロジェクトである「「知」の集積と活用の場」を通じて農業分野の技術革新の現状を知り、品質工学の活用分野を広げるきっかけにしたいと企画された。

「知」の集積と活用の場産学官連携協議会の詳しい説明は、web上に公開されている同協議会のホームページで見ることができる。例えば協議会については、

「農林水産省は、農林水産・食品分野に異分野の知識や技術を導入し、革新的な技術シーズを生み出すとともに、それらの技術シーズを事業化・商品化へと導き、国産農林水産物のバリューチェーンの形成に結びつける新たな産学連携研究の仕組み―「知」の集積と活用の場―の構築に取り組んでいます。¹⁾

等の説明がある。招待講演の冒頭では野島氏から、

同協議会が国の試験研究機関や大学、民間企業など多くの力を活かしてイノベーションを創出するために2年前に立ち上げられたこと、現在までに参加者がかなり増えていること等の説明があった。

続いて、折戸氏からは協議会についてのより具体的な説明と、協議会を構成している「プラットフォーム」、「研究コンソーシアム」という連携スタイルについての説明があった。同協議会のホームページでは、これらについて、

「会員が組織、分野、地域等の垣根を超えて連携し、新たな商品化・事業化を目指して共同して研究開発に取り組むオープンな活動母体を「研究開発プラットフォーム」と呼びます。²⁾

「プラットフォームには特定の研究開発活動を行うためのグループとしての研究コンソーシアムが設定できる³⁾

などの記載が見られる。協議会の会員同士がオープンな議論に基づいてプラットフォームを作ることや、その中で鍵となる技術開発を行うための研究コンソーシアムを作ること、研究テーマが協議会における議論で決まっていくこと等が特徴である。

その後、現在実施されている多くのプラットフォームの紹介があった。具体的には、「知」の集積と活用の場において当面推進するとされる

- ・日本食・食産業のグローバル展開
- ・健康長寿社会の実現に向けた健康増進産業の創出
- ・農林水産業の情報産業化と生産システムの革新
- ・新たな生物系素材産業の創出
- ・次世代水産増養殖業の創出
- ・世界の種苗産業における日本イニシアチブの実現の6つの研究領域と、将来性の高い「新たな研究領域」である。平成30年5月8日現在、これらの領